

## I. 呉での米軍尋問録—その背景

敗戦前後の軍都呉の市民はどんな思いで生きていたのか、米国戦略爆撃調査団報告書から読み解いてみたい。

軍都呉に誇りを持ち、不敗の神話を胸に鬼畜米英に対し必勝の信念で生きてきた市民が、米軍の度重なる空襲で市街や工場の大半は灰燼に帰し、住む所もままならぬ上に、食料を中心に生活物資が極端に不足し、絶望の淵に沈んだとき、敗戦の詔勅が出され、引き続き米軍による占領は呉市民を混乱と不安に陥れた。

中国や東南アジアの占領地で行ってきた日本軍の行為の反映として、日本軍と同様の行為が行われるのではないかと不安は行政も持ち、特に婦女子に対する保護に腐心した。

敗戦直後の呉市長や海軍呉鎮守府の布告をみると、その混乱ぶりと治安維持に心を砕いた様子が良く判る。

### 「 布告

一、大詔既ニ煥発セラル 一億国民ハ大御心ヲ奉戴シ 当局ノ指示スル所ニ従ヒ  
今後試験ニ耐フベシ

二、一億国民ハ銃前銃後ヲ問ハズ カノ限り克ク戦ヒタリ 徒ラニ他ヲ責メ又ハ  
自暴自棄ニ陥ルガ如キ行動アルベカラズ 安ンジテ各自々業務ニ精励スベシ

三、軽挙妄動ヲ戒メ 秩序ヲ紊ルガ如キ言動 其ノ他越軌ノ行為アルベカラズ  
当分ノ間左ノ事項ヲ禁止シ 違反者ハ厳罰ニ処ス

(イ) 許可ナクシテ 職域ヲ離ルヘコト

(ロ) 当局ノ許可ナクシテ 集会ヲ開クコト

(ハ) 当局ノ許可ナクシ 印刷物ヲ配布スルコト

(ニ) 戎器、凶器、火薬類ヲ携行スルコト

(ホ) 用ナクシテ街路上ニ停止スルコト

(ヘ) 午後九時以降 翌午前四時半マデ 特ニ要務ナクシテ 外出スルコト

四、停戦協定成立スル迄 戦闘態勢ヲ堅持スベシ

昭和二十年八月十五日

呉鎮守府

(出典＝呉市議会事務局 昭和二十年、呉市会協議会・議事録資料)

### 「 連合軍進駐地付近住民ノ心得 広島県警察部

来タル九月二八日以降、米軍ハ呉地区ニ逐次進駐スル予定ナルモ 従来ノ例ニ徴シ  
進駐ハ概シテ平和的雰囲気ノ中ニ取運ブモノト認メラルルニ付 一般国民ハ無用ノ  
不安動揺ヲナスコトハ禁物デアル。

唯極メテ一部外国兵士中 命令不徹底又ハ好奇心出来心等カラ 若干事故モ生ジ  
又言葉ノ通ジナイ所カラ 一寸シタゴタゴタモ発生スル虞ガアル

我政府トシテハ不法行為ニ対シテ 連合軍側ニ嚴重申入レヲ為シ 事故防止ニ努メル  
積リデアリ 又連合軍側ニ於テモ善処ヲ約シツツアルガ 一般国民トシテハ此際 更ニ  
自肅自戒特ニ左記諸点ニ留意シテ 不祥事ノ発生セザル様 未然防止ニ協力セラレ度イ  
記

外国人ハ我国ノ風俗習慣等ヲ理解セズ 好奇心乃至出来心カラ 種々悪戯ヲナス傾向アル  
ヲ以テ 国民側ノ度トシテ 最も重要ナル事ハ 彼等ノ不法行為ヲ発生セザル様 努メテ  
隙ヲ見セナイコトガ大切デアル

即チ

一、進駐地付近ノ町内会、部落会、隣組ハ 皆デ相戒メ 相助ケ合ツテ事故ノ未然防止ニ  
努力スル様 仕組ミ（自衛組織）ヲ必ズ確立スルコト。

又町内ニ外国語ノ話セル者ガアル場合 活用スルコト

二、各人ハ成ベク外国兵士ト接触シナイ様注意スルコト。 又婦女子ハ服装ヲ正シクシ  
独り歩キヤ夜間ノ外出ヲセヌ事。 家ヲ留守ニシ 又婦女子ノミノ留守居ノ住家ハ  
戸締ヲ嚴重ニスル事

三、米兵ノ習慣トシテ 其ノ土地ノ品物ヲ記念品トシテ持帰ル為メ 種々ノ物品ヲ  
好奇心ニテ強要スル事アルヲ以テ時計、万年筆、写真機等 貴重品類ハ彼等ノ目ニ  
触レナイ様注意スル事が肝要デアル。

尚 現金ハ可成手許ニ置カヌ様ニスル必要ガアル

四、万一暴行略奪等ノ事故ガ生ジタナラバ 大声ヲ発シテ近隣ニ救ヲ求メルトカ  
護身ノ為抵抗スルトカ等ノ自衛上必要ナ手段方法ヲ取ル事。

特ニ婦女子ハ死ヲ以テ身ヲ守ル覚悟ガ ナケネバナラヌ。

「ピストル」等デ脅ス様デアルガ 単ナル威嚇デアルカラ 少シモ恐レル必要ハナイ

五、外国兵ノ不法行為ニ就テハ 政府トシテ嚴重抗議ヲシ 其ノ善処方法ヲ求メル事ニ  
ナツテ居リ 米側モ事実ガ明白ナル場合ハ 自ラ適當ノ措置ヲ取ルノガ通例デ  
アルカラ 苟モ不法行為ガ行ハレタ場合ニハ国民トシテハ 犯行ノ場所、時日、  
犯行者ノ服装其他ノ特徴等 証拠トナルベキ事物ヲ速カニ最寄ノ警察官又ハ憲兵ニ  
届出ルコトカ是非必要デアル

広島三三二〇、九一〇〇、〇〇〇

（出典 広島県立公文書館 山岡文書）

また、末端の隣保班などでは 以下のような状況を現出していた。日記を見てみよう。

『「九月二十六日（水）鈍晴

報国団と警察署の肝煎りで進駐軍の為にバザーを開催することになり、各戸から一品以上  
連合軍の為に記念品を贈ることになったが、いざ品を出すとなると皆尻込みする。

家には来て貰ひ度くあるまいし、物は出し度くないのである。

何れの国の人間でも人の誠意の解らぬ筈はない。各自が誠意ある出品をすれば先方でも、  
家庭の侵入を遠慮するであろうが、廃品回収の様な気持ちで出品すれば自ら禍ひを招かねば  
なるまい。」

「十月二日（火）晴

今日進駐軍の先遣隊一千名が既に航空隊跡へ上陸してゐると云はれる。町内会の方から

進駐軍が家庭訪問して物品を強要した場合に先方へ指示するように 英語のプリントが  
回覧されたが、各家庭に一枚宛なければ不便だから十数枚書いて配布した。

これからは独学でもいいから英語を勉強し、日々変化してゆく時の流れに取残されぬ様  
努めねばならぬ。」

「十月九日火曜日、雨

雨にぬれながらアメリカ兵が家々を訪れて煙草やチョコレートを売って歩く。近所に  
賭博屋がゐて頻りにそうしたものを買ふので近所の子供たちが次々に親にねだって、  
チョコレートやチュウインガムを口にする。」

(以上出典「神垣増雄日記」呉戦災を記録する会蔵)

米占領（進駐）軍が呉に入ってから以後、街では子供英語（サンキュー、ギブミーチョコ・ガム）  
などパングリッシュ（パンパン（米兵相手の売春婦）＋イングリッシュ）が溢れていた。  
呉警察と議会・市役所は米兵のための慰安婦（遊郭の娼婦＝公娼）を狩り集め、街頭には  
生活苦の私娼、特に米兵相手のパンパンやオンリーが女学校で習った片言英語を使い、  
中学生は米軍住宅のボーイに駆り出され、「鬼畜米英」は何処かへ飛んで行っていた。

このような状況の中で、アメリカ戦略爆撃調査団・民間研究部門・戦意部は1945年  
10月から12月にかけて、「戦略爆撃が日本人の戦意に及ぼした影響」について  
面接による意識調査を全国で行った。

呉でも67名が面接対象者に選ばれたが、実際に面接が行われたのは56名であった。  
面接は12月7日から12日までの6日間に、一人につき2時間前後の時間をとって行われた。  
尋問を担当したのは10名。主にハワイ出身の日系2世で、陸軍情報部（MIS）に所属。  
専門的な教育訓練を受けた語学兵士である。

担当者の名前は後出の「回答者一覧表」に記してある。

これより早く、市民への尋問に先立って、  
アメリカ戦略爆撃調査団・市街地地域調査担当部の呉市調査訪問は1945年11月28-29日の  
間に呉市役所で行われた。

呉市での行政担当者に対する尋問

H. Mizobe（溝部） - 呉市助役

K. Okimoto（沖本） - 登記部長

J. Kakutani（角谷） - 財政課長

H. Demoto（出本） - 配給部長

U. Kunihiro（国広） - 国有鉄道貨物部呉

M. Saito（斎藤） - 人口統計関連部

K. Yoritsune（寄常） - 中国電力呉支店長

M. Hayashi（林） - 町内会長

H. Nakamoto（中元） - 呉ガス支店長

訪問担当者 : ダニエル H. ゲイガン 通訳 : M.H. ファーバー中尉

(呉戦災を記録する会 編著 「呉戦災—あれから60年—」内「呉市への尋問調査」参照)

この尋問に答えるために用意された資料は、県知事に提出され、昭和20年12月20日に  
東京・丸の内の明治ビルにいたGHQに提出され、米国戦略爆撃調査団報告に記載されている。

報告提出義務者は 広島県知事 楠瀬 常猪  
報告書の実際作成者は 広島県属 目見田 武市  
資料の提出者は 呉市長

( 内容は、呉戦災を記録する会編「黒い盆地—呉市民の戦災応募体験記と資料—」参照 )

米軍尋問者は呉市の資料や行政担当者からの尋問で、呉市内の状況の概要を把握したうえで、呉市民に質問して回答の真実性を見極め、報告書にまとめたと思われる。

この資料と呉市民の証言を突きあわせ、状況を検証すると市民の証言の実態がよく判る。

さて、尋問調書は対象となったひとり一人についての面接記録「本文」、「実態調査票」と「人物メモ」の3部から成っている。

なお、「本文」末尾に「疎開表」があり、疎開経験の有無が記録されている。

米軍の一つの目標は、空襲によりどれだけの人々が焼け出され、生活できなくなって呉から疎開していったか、つまり海軍工廠の労働者不足が生産にどう影響したかを調査した。

尋問は日本語で行われ、尋問担当者が英語訳をして上記3部構成の尋問調書を作成している。回答者7人については録音テープがアメリカ国立公文書館に所蔵されているらしい。

## Ⅱ、米軍尋問調書の役割と呉市民の回答の概要

日本を占領し、占領政策を実施した米軍を中心にするGHQ（連合軍総司令部）の関心事は、治安維持と民生の安定、米軍の無差別差別の焼夷弾爆撃・原爆投下への反感抗議の存否、天皇制の政治利用の是非などであった。それを達成するための大きな目的への一環として市民への尋問が行われたと推定される。

この市民への尋問で得られた世論を基にして、成果を生かした占領政策は効果を大いに発揮し「世界史上例を見ない成功した占領」の評価を得て、その後の日米関係の存続と支配の継続をもたらした。天皇制の維持をはじめ、戦後日本の政治経済に大きな影響を与えた。

尋問調書の質問項目 尋問調書本文には質問項目が41ある。内容は多岐にわたる。『質問項目については、呉戦災を記録する会 編著「呉戦災—あれから60年—」の第Ⅱ編「米軍による呉市民への尋問録」P.318～ ご参照ください。

『 (1)生活状態。 (2)どのような仕事に就いてきたか。

(3)戦争を指導してきた政府への反応。 (4)戦争に対する意識。 (5)進駐軍の政策について。  
(6)これからの日本の進路はどうあるべきか。 (7)天皇制について。  
(8)米軍宣伝活動の効果。 (9)空襲について (a. 経験の有無 b. 空襲の状況 c. 責任問題 )。  
(10) 原子爆弾について。 (11) 戦時中のラジオ・新聞報道について。などと大きく分けることが出来る。 』

回答者 ( R 番号で表記 ) の職業、年齢、空襲体験、尋問者と尋問日その他を一覧表にしている。  
まず呉空襲の被害者は『 回答者のうち23名 (42パーセント) が空襲で家屋被害を受けており、そのうち12名 (21パーセント) は全焼である。

『 質問項目 最近の生活状況は

「子供が多くて、食べ物に一番気を遣っている」

「配給を増やして欲しいなど食糧不足が最大の関心事である。

物価高、失職中をあげた人を合計すると４５名、つまり、８０パーセントの回答者が生活が苦しい、食べ物が欲しいと答えている。』

当時の生活状況を客観的に示す資料が残されていて、市民の苦境がよく示されている。

## A. 呉市空襲被害調査票

被害月日	死亡	重傷	軽傷	全壊	半壊	全焼	半焼	其ノ他	罹災者
20.3.19	15	3	20	61	20	-	-	-	406
"5.5	32	4	11	61	163	34	3	-	998
"7.2	1,815	118	337	-	-	21,408	134	-	118,375
"7.24	14	9	3	-	-	1	2	-	-
"7.25	7	8	6	-	1	-	-	7	37
"7.28	-	-	2	25	42	-	-	-	303
計	1,883	142	379	147	226	21,443	139	7	120,119

《 参考資料 呉市役所から米軍へ提出した資料 以下 図表は同じ 》

空襲被害の統計資料は各種あり、日時が経つほど数値の変動も大きくなっている。

例えば、「呉市戦災復興史」などでは ２、０７１人となっている。

### 物資配給状況調査票

扱者小早川主事補印

#### 1. 配給対象人口数

(注 20年8月までの人口は推計のようです。

3月の空襲開始以後の人口は、疎開で急速に減少し、呉市街地空襲では、4万人が市外に出ています。)

19年月別	人口数	20年月別	人口数
1	310,000	1	300,000
2	310,000	2	300,000
3	320,000	3	290,000
4	320,000	4	270,000
5	310,000	5	260,000
6	310,000	6	250,000
7	310,000	7	210,000
8	310,000	8	190,000
9	310,000	9	186,259
10	300,000	10	171,372
11	300,000	11	168,157
12	300,000	12	

昭和20年3月の空襲以後、人口は30万人を割り込み、7月の市街地空襲後は20万人を切り、生活できない状況が拡大して市外へ転出する人が増大している。つまり、生活できない状況を示している。



## 2. 主要食糧成年普通者 一ヶ月配給数量

扱者小早川主事補印

月別 物資名	19年												20年							
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
白米	96	89	83	93	86	76	84	73.5	55	63	51	63	74	72	83	87	89	62	49	33
圧麦	0	1	0	0	0	0	0	7	24	16	17	17	15	15	9	0	0	1	0	15
大豆	3	0	12	4	5	18	8	17	16	7	5	5	2	6	2	10	5	25	30	30
小麦粉	0	0	0	0	0	0	0	0	3	7	2	6	1	2	2	2	1	2	2	2
干麺	0.5	3	0	1	0	0	0	0.5	2	7	5	0	7	0	2	0	0	3	3	0
生甘藷	0	0	5	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
干甘藷	0.5	7	0	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
馬鈴薯	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	11	5
玉蜀黍	0	0	0	1	7	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
脱脂大豆	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	5	2	1	5	0	0	0
高粱	0	0	0	0	0	0	8	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	5	10
配給宗数	10,230	9,230	10,230	9,900	10,230	9,900	10,230	10,230	9,900	10,230	11,550	10,230	10,230	9,240	10,240	9,900	10,230	9,900	10,230	9,207

(注 当時の食料の配給品目名から、どんな代用食を食べていたか (単位/物資名が%, 配給宗数がkg)  
が良く分かります。その代用食も遅配や欠配で、食べ物の確保がい  
かに困難であったかを窺わせます。)

当時は統制経済で、あらゆる生活物資は配給制となり、主食は「配給所」へ米穀通帳を持って買いに行き、副食その他は八百屋・食品店、または「隣保班」で割り当て物資が分配・購入されていた。

多くの市民は生活できないので、法を破り「闇」で近郊の農村へ「買い出し」に行って命をつないだ。

法を取り締まる警官に捕まり、買い出し物資は没収され、時には逮捕されたりして生活不安が続いた。ドングリや高粱（中国品）を渋抜きした砂交じりの「営団ダンゴ」を行列して買っていた。

## 3. 副食品

月別 物資名	19年												20年							
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
蔬菜	60	50	50	30	30	40	30	15	10	30	30	80	30	20	20	10	10	10	2	2
果実	20	5	2	0	0	0	5	10	0	5	50	150	100	50	20	0	0	0	0	0
鮮魚	30	20	20	5	20	5	10	10	5	10	10	80	10	5	5	0	5	5	0	0
食肉	20	20	0	20	20	0	0	0	20	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0
其/他	1,000	500	500	1,000	500	500	300	200	200	300	500	1,000	200	100	100	500	200	300	100	300

(注 最初の月の配給量が、最低生活の必要量です。副食品の配給も、少量を不規則に支給しているが、空襲後はほとんど配給されていません。)

(単位/匁、蔬菜、果実が一日一人前  
当たり、その他は1ヶ月一人当たり)

## 4. 調味料

月別 物資名	19年												20年							
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
砂糖	60	60	60	60	60	60	0	60	0	60	0	60	0	60	0	0	0	0	0	0
塩	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	100	100	0	0	200	0	100
醤油	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	2.5	2.0	4.0	4.5	4.0	2.0	2.5	2.0	1.5	1.5	1.0	1.5
味噌	100	100	100	100	100	100	100	50	50	100	100	150	50	100	120	120	80	50	50	50

(注 最初の月の配給量が、生きる上での最低量です。体験記でもよく言われるように、砂糖の配給の無いのはガマンできたが、塩や醤油の少ないのに困った、ようすが出ています。)

(単位／砂糖は匁、塩は瓦、醤油は合、味噌は匁。一日一人前)

食料不足の影響を最も大きく受けたのは、成長盛りの学童でした。その改善策として、学校では運動場を耕して畑にし、花壇も食糧生産に利用して「さつまいも」を植え学校給食の食材にしました。ビタミン不足を補うため、「肝油」(鯨油など)を希望者に吞ませました。

戦後は進駐軍の放出物資を利用したものやガリオア・エロアの援助物資で「臭いミルク」でし

## 5. 燃料

月別 物資名	19年												20年							
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
薪	6束	6	5	8	7	5	2	1	2	3	2	5	10	10	5	4	3	3	0	0
木炭	2表	1	1	0	0.5	0	0	0	0	1	0	0.5	1	1	0	0.5	0.5	0	0	0
練炭	1袋	1	0	0.5	1	0	1	0	0	0	0.5	0	0	0	0	1	0	0	0	0

(注 最初の月の配給量が、一家庭の最低必要量です。  
炭やレンタンは副食調理や暖房に必要でした。)

(一世帯一ヶ月当たり)

調理や風呂に使う量には全く足りない。山へ薪や「こくば」を取りに行き補充した。焼跡の燃え残りや時には「焼夷弾の中身・ナパーム」を取り出して利用しようとして大けがや死亡事故が多発した。

練炭は悪質な石炭粉末をノリで固めたもので、燃えカスは全量の半分以上も出た。

### 1. 建築物への被害

	商業施設		工業施設		住宅施設		文化 娯楽施設		官公署 建築物		神社 佛閣施設		其ノ他ノ 建築物	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
無被害	2.268	40%	148	40%	31.143	58.6%	63	28%	72	69%	120	60.3%		
被害アルモ 使用可能 ノモノ	190	0.5%	5	1%	369	0.7%	0	0	2	2%	3	1.5%		
被害ノタメ 使用ニ耐ヘ ザルモノ	3.230	59.5%	218	59%	21.590	40.7%	30	29%	76	38.2%				
合計	5.668	100%	371	100%	53.102	100%	228	100%	104	100%	199	100%		



呉市の中心街の公共建築物は灰燼に帰した。鉄筋コンクリート製の市役所や銀行などが焼け残るだけだった。

## Ⅱ、質問に答えた回答からうかがえるもの

### 1、質問項目 戦時中と較べるとどうか？

敗戦後、食糧事情はますます深刻になった。

「生活は戦時中の方が今よりも良かった」とした

10名の内、8名が食糧事情、物価高が、戦後ますます悪化したことを理由に挙げている。しかし、残りの46名(82パーセント)は空きっ腹をかかえながらも、平和がよみがえり、戦争、空襲の心配がなくなった戦後の暮らしの方をよりよいとしている。

「今の方がよい。食糧事情は大して、変わりはないが、何しろ戦争が終わってもう殺しあいが無くなったもの」

「平和が第一だ。この戦争さえなかったら、私は老後を楽しませていただろうに。戦災で亡くした妹が可哀想でならない」「今の方が、気が楽よ。子供がたくさんいたので空襲の時は心配だった。」

「灯りが街に戻って来たわ。戦前のような呉になって欲しい」

### 2、質問項目 戦時中何が一番心配でしたか？

「この戦争は勝てるのか負けるのかをいつも気にしていました」

「戦争はいつ終わるのか、それから私たちはどうなるのか」

「戦争がどうなるか」が一番多くの人が心配をしている(21名)

「空爆が一番こわい。私の一家は防空壕のなかで寝ていました」

など「空襲」を挙げた人は14名、「食料」8名、「家族」9名と続く。

疎開をさせた子供が心配でした。子供を疎開させてまで戦争を続ける必要があったのかしら」「家族を食べさせることを一番に気にしていました」

### 3、質問項目 終戦前にこのままでは戦争をやっているといけないと思ったことはありませんか。

56名の回答者のなかで戦争で肉親を亡くした人が5名もある。

戦死2名、空襲3名。また、戦地からの帰還を待ちわびる人が9名にも上る。

兄の帰りを待つ人5名、敗戦間際の三月に海軍にとられ

父を待つ娘、さらに夫の復員を待つ人が3名ある。

### 4、質問項目 戦時中、日本の強みは何だと思っていましたか？

戦時中、日本は何を最大の武器として(52パーセント)の人が神風特攻隊あるいは決死隊(一四名)、大和魂(11名)、天皇への忠節心(2名)、上官への絶対服従(2名)を挙げている。「私は日本の強みは国民が神様である天皇をいただき、その命令にはよろこんで従うという点にあると思っていました」

「大和魂と精神力。肉体は滅びても精神は永遠に残り、我が国を守るために無限に戦い続けるのだ」と私たちは習った」

「お国のために戦って死ぬのだという日本兵の覚悟が強みであった」

「私は日本の兵隊と彼等の大和魂とを固く信頼していました。」

(大和魂というのは何ですか?)それは死と魂とを固く信頼していました。」



「それは死ぬことを恐れないということです」しかし、人々の本当の持ちはどうだったのか。

次のような声もある。

「私のような年をとった者は日本のどこが強かったなど考えたこともないです。人の話を聞くだけですが、何がなんだかかわからんですよ」「日本には強いところなどなかったと思うよ。わしは食べていけるだけありゃあもう満足していた。何が強い点かなど、考えたこともない。気にしていたのは食べ物のことだよ」「いつも日本には不敗の軍隊があると聞かされてきました。

(それを信じていましたか) いいえ、家では多分そんなことはないよねと話していました」

#### 5、質問項目 空襲の経験はありますか？

空襲を経験した人は43名(78パーセント)

内訳 3月19日 グラマン空襲、 10名 5月5日 広海軍工廠空襲 7名  
7月2日 焼夷弾空襲の経験者 20名 うち 家屋全焼被災者 12名(9名が転居した)  
8月6日(原爆) 2名 呉海軍基地など、 14名

#### 6、質問項目 日本空襲の責任は日米いずれの側にありますか？

アメリカ側に責任がある。(7名) どちらとも言えない。(8名)

日本側に責任がある。(30名) 両方に責任がある。(1名) 回答なし。(10名)

「本土の防御を日本政府が適切、効果的にしなかった」

「指導者のせいで戦争となったのに、アメリカは何故弱い立場の国民をいじめるのか。

国民の家屋すべてを焼き尽くすなど嘆かわしい」

ここには、「無差別爆撃」への抗議がある。

#### 7、質問項目 原爆をどう思いますか？

回答者の多くは8月6日の朝閃光、爆発音不気味な原子雲におののいた経験を持っている。

実際に広島で被爆をしたひとが二人もいる。

「こわかった、威力に圧倒された」(25名) 「誰も生き残れないと思った」(8名)

「日本はもう駄目だと思った」(9名) 1名のひとが「残酷、非人間的だと思った」と言っている。

「アメリカは何故原爆を使用したのか。そのような爆弾は使用を禁止する(国際)法があると聞いている」

「私は何人かの被爆者にお会いしたとき、目を背けました。本当にむごい光景でした、

「戦争中とはいえ、こんな破壊力のある手段を使用するのはむご過ぎると私は思いました  
ひとこと、「(沈黙)(質問を繰り返す)大変残酷です」と言った。

これらの原爆投下はむごい。人間のやることではない。

絶対に許せぬ」こそが「ノーモア・ヒロシマ」平和運動の出発点になったと思われる。

#### 8、質問項目 A 天皇制について。

56名中、53名、95パーセントのひとが天皇には引き続き在位をしてもらいたいと、天皇制護持を表明している。残り3名の意見を記して置く。

「自分のことがどうにもならないのに、天皇どころではないわ。天皇がどうなろうと私はかまわない」

「天皇制はない方がよいと思います。天皇崇拝が強制され過ぎますので」

「今まで天皇を敬うようにしつけられてきたけれども、天皇にいてももらわなくっても  
変わりはないようね」

9、質問項目 戦時中、国民はともに苦勞をしたか？

国民はみんな苦勞をした（33名） 一部の者は得をした。（23名）

41パーセントの人が「金持ちや上層部はいつも十分な食料、衣類などを闇市や権力を  
かさにきて手に入れていた」「戦争や闇で太った連中がいる」（38名）

これは（質問項目12）で見られる多くの告発、  
「指導者は自己中心だった。」「配給を不正に受給したり」などと共通するものである。

8

10、質問項目 今後日本がどう変わらなければならないと思いますか？

「階級差別をなくして欲しい。上層階級、下層階級の区別なく、同じ扱いを受けるべきだ」  
「アメリカのように男女共学制に」「私は日本はアメリカの政策に沿って進むべきだと思います」

他に12名がアメリカの占領政策に好意的な意見だ。

これは（質問項目23）で、敗戦後の運命を問われて、

43名（77パーセント）が「殺される、奴隷的強制労働、過酷な生活を強いられる」と  
覚悟していた事実を考慮して検討をすべき数字である。

「軍国主義を払拭して民主的な国にしたい」

「日本は平和国家にならなくてはならない。好戦的であってはならない」

「まだ制限はあるけれども、言論の自由が進められているのは良いことだ。民意の尊重が第一だ。  
平和に暮らし、世界の他の国々と協力をして行きたい」

「我が国の女性の地位を変えるべきです」

「二度と戦争はしてもらいたくない。女性はもっと自由に教育を受けるべきだ」

まだ焼け跡で防空壕生活をする人がいた敗戦後三か月の呉。市民が描く日本の未来である。』

### III、尋問録の具体例をいくつか例示し、尋問の状況を再現してみよう。

R8 機械工（造船所）男性・52歳、アメリカからの帰国者。

（アメリカ生活を経験しているので、アメリカの力や合理的判断力を持った回答をしている。

しかし、日本人としてのアイデンティティーを保持していて、天皇制などの保持を訴えている）

Q1. 現在の暮らし向き（生活状態）はどうですか。

A. 食糧の配給不足に困っています。闇市の物価が極端に高い。私の家族の食欲を満足させる  
ことが私には不可能だ。

Q2. 戦時中の生活に比べて現在の生活はどうですか。

A. 空襲や何やかでくつろいで働けたことが一度もなく、夜、帰宅しても灯火管制で新聞も  
読めなかった。戦争が終わった今、私のところはほっとして、余裕綽々です。

Q3. 戦時中どういうことで一番心配しましたか。

A. 何年も前になりますが、私はアメリカにいました。アメリカの膨大な資源と産業を見て  
きました。このような国と戦争をするのは失敗でした。すでに中国と4—5年戦っていた  
のだから、アメリカを敵に回すなど間違いだった。（何か他に心配なことは？）食糧不足です。

Q4. 今年の初め（正月）から今までどんな仕事をしていましたか。 A. 私は海軍で働いていました。

Q5. 今年の初めから今まで、仕事の能率はどうでしたか。

- A. 空襲や何やかやで私達の仕事の能率はこれまでに較べて落ちてしまいました。  
また、食料品も足らなかった。
- Q6. 今年の初めから今まで、仕事の状態はどうでしたか。  
A. 私達は思うように働けなかった。先にも言ったように空襲や何やかやで。
- Q7. 今年の初めから戦争が終わるまで休みはとれましたか。 A. 4日くらいだったかなあ。
- Q8. その休みをとった理由は何ですか。 A. 休みを取った理由は娘が病気をしたからでした。
- Q9. 戦時中、日本の強みと思う点は何でしたか。  
A. 日本の一番の強みは「特攻精神」であったと思います。  
自分を捨ててお国のために死ぬ覚悟でした。
- Q11. 戦時中、戦争の指導者のやり方（施策）をどう思いましたか。  
A. 彼らは口先では国民を励ましながら、何もかもを配給制にしました。  
（そのことをどう思いましたか） こんな指導者じゃ戦争に勝てっこないと思いました。
- Q12. 戦時中、戦争の指導者がとっていたやり方（生活についての施策）をどう思いましたか。  
A. 彼らは言論統制が上手でした。連中も大したことはないなと思っていました。
- Q13. 戦時中、政府（内閣）が変わる度にどういうことを思いましたか。  
A. ひとことで言えば、戦局が不利になったので、また内閣改造をやったのだなと思いました。
- Q14. 戦時中、人々の振る舞いや態度に変化がありましたか。  
A. 私には人々の親切心が戦争中は希薄になったと思えます。
- Q15. 戦時中、一般人は一樣に苦しんでいたと思いますか。  
A. この戦争ではみんな同じよう苦勞をしたと思います。  
しかし戦争で得をした少数のひとがいるような気がします。
- Q16. 戦争に勝ち目がないといつから思いましたか。  
A. アッツ島、ガダルカナル、マーシャル諸島などが敵の手に落ちたとき、私は敵が近海に  
接近しつつあることを知りました。私はこれは駄目かなと思い始めました。
- Q17. 戦争に負けると、いつからはっきり思いましたか。  
A. 45年3月19日、呉が初めて爆撃をされたとき友軍機も見えず、対空砲火も殆ど  
沈黙状態だった。このとき私は勝利は無理だと確信をしました。
- Q18. 終戦前に、このままでは戦争をやっていけないと思ったことはありませんか。  
A. 45年6月22日、呉が焼夷弾攻撃で徹底的にやられた日、私はもうお手上げだと思った。  
それから、8月広島が原爆を投下されたとき、日本は負けると確信をしました。
- Q19. 日本が降伏したことを聞いてどう思いましたか。  
A. この時まで日本国民はみんな最後まで戦うように鼓舞されてきました。  
降伏したと知って、いいようもない無力感に襲われました。
- Q20. 進駐軍指令部のとっている方針についてどう思いますか。  
A. 私は彼らが採っている政策についてはハッキリとは知りませんが、私達にえらく親切に  
してくれているなと感じています。
- Q21. 今後2、3年、あなたの家族はどんな暮らしをすると思いますか。  
A. 私も家族の者もこれから苦勞をするだろうと心配です。あるかなしかの食料で  
命をつないで行くのが大変だという意味です。
- Q22. 今後日本がどう変わらねばならないと考えますか。  
A. 軍国主義者達を倒して、連合国が示す民主的な道を進まなければならない。
- Q23. もし終戦になると、どうなると考えていましたか。

A. イタリアとドイツが負けた後、私はみんな奴隷としてこき使われ、食料を取り上げられるだろうと思いました。

Q24. 戦時中、アメリカ軍がまいた宣伝ビラののことを知っていましたか。

A. 宣伝ビラについては聞いたことがありました。

ひとつのビラには時計に米軍が奪還した地域名を全部図示した上で、次は日本だ、時間は迫っていると述べていたとのこと。私はこのビラのいう通りかも知れないとよく思った。

Q25. 戦時中、反日放送を聞いたことがありましたか。

A. 個人的に聞いたことも、また反日ラジオについて聞いたこともありません。

Q26. あなたの町が空襲されることを予想していましたか、免れると思っていましたか。

A. 呉は軍港だから爆撃されるものと思っていました。

Q28. アメリカが日本を空襲した時、その責任はどちらの側にあると思っていましたか。

A. この戦争は日本が始めたのだから空襲については何も文句は言えないと思っていました。

Q29. 戦時中、空襲をしたアメリカ軍のことをどう考えていましたか。

A. 指導者達はアメリカ人のことを悪くいっていましたが、私はかれこれ30年前にアメリカにいたので、アメリカ人がそのように悪人ではないということを知っていました。

Q30. 戦時中、新聞・ラジオはどういうふうに報道していたと考えますか。

A. 私には新聞が真実を伝えていないことが分かっていました。(それについてどう思いましたか) 新聞は何故事実を書いて、国民に実情を知らせないのかと不審に思いました。

Q31. アメリカがある町を空襲するぞ、と予告したことを聞いたことがありますか。

A. 敗戦の1週間ばかり前でしたか、噂を聞いたことがあります。(それをどう思いましたか) 噂は空襲についてでしたが、私は信じました。

Q32. 最初のアメリカによる本土空襲のことをどう思いましたか。

A. 日本軍機がアメリカ空襲をしたということも聞かないうちに、敵に先を越されて空襲をされた訳だ。空襲は続くだろうと思っていました。

Q33. あなたの町で防空設備はどうであったと思いますか。

A. 町はずれでは山に沿ってトンネルが掘られたけれど、町なかは建て込んでいて、準備が進まなかった。焼夷弾よけの防空壕は作ったけれども、爆弾には役に立つような代物ではなかった。

	昭和十九年十月二於ケル%	昭和二十年四月二於ケル%
公共待避所	横穴式 11,000M } 40% 掩蓋式 2,000個	横穴式 26,000M } 80% 掩蓋式 2,800個
工場待避所	掩蓋式 702個 60%	横穴式 100M } 80% 掩蓋式 702個
個人家庭又 ハアパートニ 於ケル待避所	無掩蓋式 18,355個 } 80% 掩蓋式 27,504個	掩蓋式 43,256個 } 100% 横穴式 1,200M

《参考》(呉市役より米軍への提出資料)

Q34. 原子爆弾のことをどう思いましたか。

A. 原子爆弾については以前聞いたことがありました。しかし広島に投下されたとき、私はその威力にびっくりしました。(そのほか何を思いましたか) 私はその驚くべき破壊力のせいで、広島には植物が15年間は育たないだろうと聞きました。  
私は本当にショックを受けました。



Q35. 空襲の経験はありますか。

A. はい、6月22日でした。空襲になって、私達のまわりにびっしり爆弾が落ちて来ました。私は防空壕から防空壕へと逃げました。何人もの人が倒れていました。あるいは負傷し、あるいは息絶えたまま。自分を振り返る余裕はなく、敵機にやられるかどうか、天に運を任せて私は防空壕のなかへと飛び込みました。

Q36. その空襲の状況を詳しく話して下さい。

A. 7月2日焼夷弾空襲のとき、私は家から見ていました。私の家は山の頂上近くでした。眼下の町は炎に包まれていて、炎が徐々に山腹をのぼって来る。私は自分の家も焼けるものと覚悟しました。しかし、幸運にも火勢は途中で衰えました。

Q37. 空襲で恐かったのは昼ですか、夜ですか。

A. 私は昼間の爆撃の方が怖いと思いました。(何故ですか) 目に入ってくるからです。次から次へと建物がやられていく光景は恐かった。

Q38. 焼夷弾と破裂弾のどちらが恐いですか。

A. 先に述べたように破裂弾の方が恐い。

Q39. 空襲の度に恐ろしくなりましたか、慣れましたか。

A. 空襲には慣れてきました。B~29が来たら本当は恐かった。しかし慣れてきて、対処の仕方も分かってきました。

Q40. 空襲の善後策(救済策など)はどうでしたか。

A. 特別の救済策については正確には知りません。

Q41. 空襲を受けなかった人々は、罹災者に対してどの程度援助しましたか。

A. こうしたことについて私は正確には知りません。

Q22a. 天皇陛下をどう思いますか。

A. 天皇には2600年にも及ぶ長い統治の歴史があります。だから、天皇には現状のまま存続していただくのがよいと思います。

(R61) 遊郭娼妓／女性／23歳

(「人物メモ」非常に魅力的である。／生活に追われ、念頭にあるのは借金を返済するために稼ぐことだけで、世の中の出来事には無関心だったようだ。)

Q1. 現在の暮らし向き(生活状態)はどうですか。

A. 私は広の遊郭で働いています。進駐軍のために本当にお役に立っています。働く時間は長いし、遅くまでかかります。私は最初から働いていますが、みんな私たちの接待を喜んでいます。兵隊さんたちが喜んでくれるので、私は満足をしています。

Q2. 戦時中の生活に比べて現在の生活はどうですか。

A. はい、ずうっと今の方が良いです。いつも、体中が踊っている気分です。(例えば?) 以前は私たちは縛られていて何も出来なかったの。でも今は好きなことが出来ます。

Q3. 戦時中どういうことで一番心配しましたか。

A. 空襲が心配でした。呉の朝日町に住んでいました。母と子どもたちのことも心配でした。

Q4. 今年の初め(正月)から今までどんな仕事をしていましたか。

A. 年はじめから、六月頃まで私は病気のため何もしていませんでした。しかしその後、爆撃まで芸者をやりました。爆撃後、私は農業をしました。

Q5. 今年の初めから今まで、仕事の能率はどうでしたか。

A (再度質問をした) 以前に比べてずうっと楽になりました。

(何故?) 日本人は乱暴すぎますが、アメリカ人は女性に非常に親切ですから。

Q6. 今年の初めから今まで、仕事の状態はどうでしたか。

A 以前、私はいつも病気をしていましたが、今は元気です。

Q9. 戦時中、日本の強みと思う点は何でしたか。

A. その様なことについては考えたことはありません。戦争について考えたことはなかったです。

Q10. 戦時中、日本の弱点と思う点は何でしたか。

A. あなた方が有能なスパイを国中に配置していて、日本に大きな損害をもたらしているのだと聞いたことがあります。

Q11. 戦時中、戦争の指導者のやり方(施策)をどう思いましたか。

A. (再度質問) 戦時中私はいつも病気をしていましたので戦争のニュースとは無縁でした。

私はいつも借金に追われていて、その借金を返済すること以外何も考えませんでした。

(彼女からは何も聞き出せなかった)

Q12. 戦時中、戦争の指導者が生活上とっていたやり方(生活施策)をどう思いましたか。

A. ここ五、六年間私はいつも病気でした。今、私が元気なのを見て、みんな驚いています。

(質問をくり返す) 私はその様な事柄に気をもむ時間はなかった。

借金を返すために稼がなければならなかったの。

Q13. 戦時中、政府(内閣)が変わる度にどういうことを思いましたか。

A. こわかった。これから何が起こるのかと心配でした。日本は負けると思っていた。

アメリカは格段に優れた設備を動員していたもの。

Q14. 戦時中、人々の振る舞いや態度に変化がありましたか。

A. (再度質問をする) (お互い同士の気持ちに変化がありましたか?) あったと思います。

人々は少し落ち着きが無くなりました。着るものも変わってきました。

Q15. 戦時中、一般人は一樣に苦しんでいたと思いますか。

A. 私は本当に困りました。他の人は困らなかったのではないかしら。金のない者が  
お金持ちと同じように寄付をさせられたり、国債を買わされました。

Q16. 戦争に勝ち目がないといつから思いましたか。

A. 私は思ったことはありません。

Q17. 戦争に負けると、いつからはっきり思いましたか。

A. 七月です。この月、私の住んでいたあたりがひどく爆撃され、船は全部撃沈、

何もかもが破壊をされたのでした。私は呉沖の島に住んでいたので数多くの破壊を目に  
しました。私の島の周囲には多くの船がいたので、激しい爆撃に会いました。だから、  
私ははっきりと日本に勝ち目はないと思いました。

Q18. 終戦前に、このままでは戦争をやっていけないと思ったことはありませんか。

A. 軍艦や他の船が沈められるのを見て、私はもう駄目だと思いました。

Q19. 日本が降伏したことを聞いてどう思いましたか。

A. 八月一日に私は空を見て、友達に日本は負けるわよといいました。

そしたら、一五日に降伏となったので、まあ、友達たちが驚いたこと。

私は非常に悲しかったけれどもほっとしました

Q20. 進駐軍指令部のとっている方針についてどう思いますか。

A. 非常に満足しています。彼等が親切でやさしいので私はうれしい。

（何故？）全てが寛大で誠実だからです。

Q21. 今後二、三年、あなたの家族はどんな暮らしをすると思いますか。

A. 私の家族は音戸（島）の農家です。今までどうにかやって来たので、これからも変わらず、やっていくと思います。

Q22. 今後日本がどう変わらねばならないと考えますか。

A. 私には大きすぎる問題です。私はあなた方の軍隊が言っていることに満足をしています。

Q22 天皇陛下をどう思いますか。

A. （再度質問）分かりません。私自身のことでも考えられないのです。

どうして天皇のことが考えられますか。天皇がどうなっても私には関係がないことです。

Q23. もし終戦になると、どうなると考えていましたか。

A. 私はこのような職業なので、農業をやられると考えていました。私は農業が大嫌いなもの。

Q26. あなたの町が空襲されることを予想していましたか、免れると思っていましたか。

A. 空襲はきっとあると思っていました。こわかった。呉が海軍基地で軍艦もいっぱいいるので。

Q28. アメリカが日本を空襲した時、その責任はどちらの側にあると思っていましたか。

A. 私たちに責任があると思います。これは戦争です。日本はあちこち爆撃をしたのだから、私たちも仕返しをされても覚悟をすべきです。

Q29. 戦時中、空襲をしたアメリカ軍のことをどう考えていましたか。

A. 私は学校でアメリカ人については習っていたので、彼等がどのような国民かは知っていました。今考えているのと同じでした。私は友達によくそのことを話しました。

友達はアメリカ兵に会って話してみたいと思っています。

Q30. 戦時中、新聞・ラジオはどういうふうには報道していたと考えますか。

A. 私は新聞・ラジオがうその噂を流し続けたやり方が嫌いでした。私は将校に知り合いが何人かいましたが、彼等は日本はさんざんやられているのだと、いつも私に云っていました。

Q32. 最初のアメリカによる本土空襲のことをどう思いましたか。

A. 私はこれでおしまいだわと思い、怖かったです。学校ではアメリカの科学が進んでいることを学んでいたの、私はこれまで見たこともないような、何が起こっても不思議はないという気持ちでした。

Q33. あなたの町で防空設備はどうであったと思いますか。

A. 大したことはなかったです。非常にお粗末でした。

Q34. 原子爆弾のことをどう思いましたか。

A. 広島が爆撃されたのは七月六日（ママ）でしたが、私は私達の地区が爆撃され、船が全部沈められた時にもう勝ち目はないと考えていました。光が炸裂したときは怖かったです。しかし爆発の後、私の地区の頭上を一機が広島へ向かって飛んでゆきました。写真撮影のためであったと思います。

Q35. 空襲の経験はありますか。

A. はい。七月二日に爆撃に会いました。次は私が畠に出ていた時のことです。

B24が機銃掃射で急降下して来たのです。私は二か所撃たれました。その時、私にはパイロットの姿が見えました。これは私が呉を離れて音戸へ移った後の体験です。

Q36. その空襲の状況を詳しく話して下さい。

A. 焼夷弾が家を直撃しました。全ての品物を失ったのです。誰も死にはしなかったけども、ほとんどの者が火傷をしました、みんな必死で逃げました。私は思いっきり泣きました。

私は借金で困り果てていたのに、私達の家がなくなったからです。

Q37. 空襲で恐かったのは昼ですか、夜ですか。

A. 夜です。寝ているときだから、大変です。私たちの家は夜爆撃され、私は火傷をしました。

戸外に飛び出して、私達は六人で逃げ始めました。途中で四人とはぐれました。

安全な場所に着いたとき、ひとりの男性が私達に何か痛み止め用の薬をくれました。

Q38. 焼夷弾と破裂弾のどちらが恐いですか。

A. 破裂弾です。焼夷弾よりも効力があり、及ぶ範囲が広いから。

Q39. 空襲の度に恐ろしくなりましたか、慣れましたか。 A. いつも怖かったです。

Q40. 空襲の善後策（救済策など）はどうでしたか。

A. 私達は準備を十分にしていなかった。私達にもっと良い設備と準備をして欲しかったです。

Q41. 空襲を受けなかった人々は、罹災者に対してどの程度援助しましたか。

A. みんな衣類や食物の援助をしてくれました。

（引用：「呉空襲—あれから60年」 呉戦災を記録する会編著）